

# 方言の生態

藤 原 興 一

私は、國語を見ようとして、方言におもむく。方言は、國語のきびしい現實であると思う。

方言は、方言社會大小の認定に應じて、いろいろの形のものでありあけるこまができる。が、終局には、この國土全体をおおう國語状態が、一大方言統一〈日本語方言共時態〉としてさらえられる。これを『日本語方言』とよぼう。今は、この日本語方言を大観して、方言の生態を考える。

○

「方言の生態」は、いろいろに考えられよう。つぎに、語法の成長する事態をさらえてみる。

動詞に「なさる」という助動詞のついた言いかた、「行きナハル」がある。これは、近畿地方では、「行カハル」になつた。「行カハル」はさらに「行カル」もなつている。「行カル」になつたものでは、「行カル」も、「ル」がよりはなされやすい。新しい成分の誕生である。「行カハル」でも、これは、一段動詞の場合の「見ヤハル」なきと合わせ見られて、「ハル・ヤハル」こそはなされやすい。國語の表現法で、本動詞に助動詞が累加すると、方言の世界では、いわゆる標準語（あるいは共通語）に見られるのとはこまかわつて、新しい成り行きが自在におこっている。こまはの熟合のうえに、新しい語法要素が成長している。「見ナサイ」「行きナサイ」の類は、「見ンサイ」「見一サイ」「行きンサイ」なきともなれば、「見サイ」「行きサイ」もなつた。ここに「サイ」という特有の形がおこっている。九州に見いだされる。そこでは、「見サイ」に對して「行かい」というのもあつて、「イ・サイ」の對立形が見られる。「見サイ」は、東北でも、「見セー」「見ベー」の形で見いだされる。

「見サイ」は「ナ」をおとし、「行かハル」も「ナ」をおとした形になつているが、中國地方にいちじるしい「見ナイ」の類型は、「サ」をおこしている。日本語方言の生態は、國土上の方言のこの統一的地盤で、いろいろの變化をおこしている。さういうきわに、またさういうわけで、あの方向をと

り、この方向をさるのか。

新形・新要素が成立するに、これは、その形ないし音聲効果などにあい應じて、新しい表現性・表現価値をにう。「行きナイ。」「きナイ。」などは、「行きナサイ。」「きナサイ」なごきはそうさうにちがつたものになっている。くだけた、時に卑俗味のある新語法事實さになっている。

新形は、發言活動上の生理的自然によつて、機械的にみちびかれることもあろう。また、表現意欲の積極的な活動がつよい動力になつてのこごもあるご思う。内外は、自然にあい應ずるのがつねであるにちがいない。



對話のむすびのよびかけごば、文末助詞には、いろいろの新形成立が見られる。文末助詞の繁榮は、方言の生態で、なかんずく注目すべきものごご思う。この繁榮によつて、對話の待遇法、あるいは待遇表現意識は、多彩に色づけられるごごになっている。

「そうぢャナー(ノー)。」なごごいう「ナ」「ノ」類の文末助詞は、日本語方言全体のうで、さまざまの複合形をひきおこしている。その一つに、「ナモン」「ノモン」の類がある。これはもご、**「ナー(ノー)に「もし」**のよびかけが累加したものであつた。「ナー」「ノー」ごむすんだのを、さらに「もし」ごよびかけるうちに、類似の要素、「ナ」「ノ」の類ご「もし」とは、ついに一体化したのである。新文末助詞の生成である。ご同時に、文末助詞表現法は、新たな方法を加えるごごになつた。「ナモン」であれば、これは、「ナ」ごも「モン」ごもちがつた一つの特定制要素ごして、その機能を發揮するよごになつている。

さて、「ナモン」や「ノモン」が成立するに、これらはまたその形の變移をおこした。「ナモン」からは「ナモ」「ナム」「ナンシ」「ナツシ」「ナーシ」「ナン」なご。「ノモン」からも「ノモ」「ノンシ」「ノツシ」「ノーン」「ノシ」なご。その他、「ネシ」「ニシ」「シ」なごができている。異形ごごにその用法があり、用途の獨自性がある。ごめごもなく分化したこれら諸形は、形の産物であつてまた心の産物である。方言の實際生活が、このようにした。

一つ一つの形について見れば、その分布は、あるいは九州の一部に存在するごご、四國方面ご東海道方面に存在するごご、東北地方に廣く見いだされるごご、へんばが見られがちである。しかし、この種の何らかの形を示しているごごいう点では、國の多くの地方が共通性を示すごごになつている。日本

語方言の、文末助詞をよくうむ地盤的特質をみこめるべきであろう。

國語の表現法は、將來さう動いていくか。文末助詞による表現法、その簡潔できわい表現法が、だんだんにつよいはたらきを示すようにはなつても、よわまることはないだろう。國語は、方言さいうすがたで、そのような傾向をよく見せているように思う。

もこより、文末助詞そのものの中には、随時の消長がある。「ナ」「ノ」類の、ナ行音文末助詞と言へるものにかぎつて見ても、そうである。「そうちや＝。」などの「＝」なきは、以前はもつこおこなわれたかこ推察されるが、今はもう退化の一路にある。それが今日、さかく海邊の諸地域に見いだされるのは、深究にあたひする。「ノ」にしても、すこしずつではあつても、全國的に、落ち目にあるさ見られよう。他品詞その他が、いろいろな形になりつつ、文末助詞に轉成してくる傾向は、いちじるしいものがある。たとえば北部九州で、「こそ」にもさづく言いかたを、「あの クサン。」などとしている。東京語では、「何々です コト。」などさ言うが、「コト」も文末助詞化しているさ見てよからう。

國語の方言的地はだは、その文末助詞表現法で、このような息づきかたをしている。



ナ行音文末助詞の「＝」は、なぜ衰退しつつあるか。かつ、「ヌ」のないのはなぜであろう。こう考へてくるさ、問題はおのすから、こさばの、きこえるこえのこさにおよんでくる。いつたい、方言は、口のことばで、こえのことばである。どんな語法事實も、こえの事實である。語法上の、國語の方言的生態は、また、發音上の生態である。

とすれば、發音事實の見かたもまた、單純に發音だけを見るのであつてはならない。こえの事實も、表現上のことである。たとえば音聲變化も、ただに音聲變化として見はなすことはできない。ここに、『表現音韻論』の考が成り立つ。表現音韻論は、方言の發音上の生態を、人間的な事實として解釋しようとするものである。



方言の生態、國語の方言的生態を注視するのに、その流動推移・生滅起伏には、まさに、言語社會の社會意志とも言うべきものがみとめられる。社會の言語は、すべて社會意志によつて動くと言へる。

社會意志さは、村なら村の、目に見えない道德規準のようなものである。

それは、社會の個々人のむねのうちに存在し、かつ、個々人を越えている。——一つの新語があらわれる。もとは誰かの創作にちがいない。共感する人がこれを支持する。時に共感が廣まる。これでこの新語は、世の中のことばになりはじめる。一新語がものになるのは、社會がものにするのである。社會の風となると、一人二人の力ではこれをさうすることもできない。しかもその風は、社會人個々のあたみに宿つている。個人が、創作者であるとともに模倣追隨者であるところに、社會意志の存在と様態が明らかである。

社會意志のはたらきによつて、方言の生態ないし國語の方言的生態は、自律的な發展をとけていく。これが國語の歴史的な發展のすがたである。

ここにまた、「方言の生態」に即應する國語教育の任務と作業さかをはつきりこしてくる。

(廣大助教授文博)